

独立と連合と

——ヘンリー・ヴォーン小考 (十一)——

森田 孟

本誌前号では、ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の『火花散る燧石』*Six Scintillans* (1650, 1655) 第二部に現れる三種の日曜日 (“White”, “Trinity”, “Palm-Sunday”) が表題の作品を紹介したが、第一部には後半の初めの部分にもう一篇「サンデイズ」が登場する。

息^{そく} [四] 曜^{やう}日 Son-dayes

真物の〈休息〉の明るい影！ 至福の光線⁽¹⁾幾筋、

週に一度の天国、

この中に捕らわれている次の世界の喜び、

時間の中に永遠を

求める一日、我らがあらゆる時代の上を

〈登ってゆく〉ための踏み段、人間をたび重なる暗い日々
の間明るく照らす〈灯火〉⁽²⁾、そして丸々一週間の
飛翔を豊かにたつぷり贖うもの。

2

せつかちな人間への〈滑車〉⁽³⁾、時間の四阿、

狭い道⁽⁴⁾、

移された〈楽園〉、〈神〉の歩行時間、

〈涼しい〉別の日⁽⁵⁾、

〈生き物〉の〈祝祭日⁽⁶⁾〉、〈神〉の塵との話し合い、
ここでの天国、あの〈ミルラ〉の丘陵⁽⁷⁾にいる人間と花々、
御使いの下降、〈信頼〉の〈回帰〉、
栄光の〈輝き〉 六日間驟雨の後の。

〈教会〉の愛の宴⁽⁸⁾、〈時〉の〈特権⁽⁹⁾〉、
そして全体から

引き出された〈利息〉、〈蜜蜂の巣〉と蜜蜂の群、
そして安息の家庭。

〈太陽〉の輪郭を〈チョークで描いた〉天の川、誤りを
誘う時の間を導いてゆく〈糸口⁽¹⁰⁾〉、そして十分に語られた
地上での〈天国〉の一味、誓約、更に豊富な
祝祭の〈合図〉、そして栄光に充ちた〈外部宮廷〉。

[M・四四七—四八]

訳注

(1) Shoots of blisse 「後退」 「小考」(1) 18・19」の二〇行
目には 'shoots of everlastingness' 「悠久の若芽」とある

「M・七三九」。ここも「光線」に「若芽」の意が重なって
いよう。

(2) Lamps ... dark days G・ハーバート「日曜日」"Sunday"
「七行詩九連計六三行の詩、W i l・二七〇—七五」の六
—七行目「その週は暗かった ただ御身の光だけは／御身
のタイムマツが道を示して下さる」と比較「R A・五六八」。

(3) The Pulleys G・ハーバートに同題の作品「五行詩四連
計二〇行、W i l・五四七—五〇」がある「M・七三九」。

(4) The narrow way 「悔い改め」 「小考」(八) 53」の八行目
の同じ語句参照「R A・五六八」。

(5) Gods ... day 「創世記」 3・8 「一日の涼しい時間に主
なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた」 「同」。

(6) The Creatures Jubile 「生き物」とは勿論「生物」全体で
その一部の「人間」を表す提喻。ユタヤ暦では五十年目と
とが返還と解放の年として遵守されることになっており
(「レビ記」 25・8—17)、これが Jubilee として知られてい
た。後にはこの語は譬喩として回復とか救済の期間を指す
ことになった「R A・五六九」。

(7) hills of Myrth 「英国教会」 「小考」(四) 7、訳注(2)
の四行目に同じ表現があり、「樹液」 「本稿後出」 一一行目
には「ミルラの丘」 'an hil of myrth' がある「M・七三九」。

(8) love-feasts 原始教会では「愛の宴」は兄弟愛の象徴と
して共同で食事をする事であった。後にはしばしば聖餐式

(Eucharist) を表すことになる「RA・五六九」。

(9) Prerogative 週の最初の日であることを表す優先を与える印とか特質「E・二〇六」。

(10) a Clue..erring hours 「星座」小考(七) 22、24、訳注(2)の「一四行目」(糸口)を巻き戻してゆく」参照。

「太陽 [日] Sun」ならぬ、それと同音異語の「息(子)」Son「sun」の古い綴りでもあったが「曜日である。何しろ「神の」息子にして太陽であるキリスト」(Christ the son/sun)「小考(十) 20」なのだから、この日々(複数形)はキリストの日々であり、件の三種の日曜日以外の日曜日を指すのだろう。華麗に羅列展開されるこの「息 [日] 曜日」の定義(めいたもの)が壮観である。A B A B C D C D の型で押韻する八行詩(四行ずつに分けられている)三連で、音節数は二行目と四行目が四音節(第一連二行目は五音節)、残りは十音節の詩。

この作品の前後に収録されている未だ触れていない詩に、今回は注目してみよう。前方の「墮落」小考(二) 54—55」に続いて「聖書」が来る。「墮落」の次に「聖書」とは何だか皮肉のようだが、むしろ当然の順序というべきか。

「聖書」は墮落した「魂たちが孵されて(永遠)へと到る所」だとすれば。

聖書 H. Scriptures

歓迎 貴重な書物、魂の〈喜び〉にして糧！〈聖霊〉の御馳走、抜き出された〈天国〉はそなたの中に在る、そなたは生命の〈宣言書〉、染み一つない〈鳩〉の巢にして魂たちが孵かえされて〈永遠〉へと到る所⁽¹⁾。

そなたの中には隠された石〈マンナ〉が在る、⁽²⁾

そなたは偉大な〈万能薬〉⁽³⁾で、稀少で、〈精選品〉、

あらゆる〈神秘〉に開いている〈鍵〉、

〈文字〉になった〈言葉〉、〈声〉となった〈神〉。

おお 私は深々と我が堅い心に〈切り込〉めばよかつた⁽⁴⁾

そなたの中の一行一行を！ そうすれば私は呻きなが

ら訴えようものを

我が〈主〉が囲い込まれることを、そしてこの上なく巧みな〈業〉⁽⁵⁾によって

その方自身にお返ししようものを（律法）と（石）を。⁽⁵⁾

ここで読もう、私の過失は御身のものだと。この（書

物）と私は 御身に

告げよう、優しい（救世主）御身は亡くなった！と。

〔M・四四一〕

訳注

- (1) The Doves..Erenite:「混乱と脆さ」〔小考(五) 10〕
四七行目「私の魂を解したまえ、それが御身の居ます所ま
で」とG・ハーバート「聖霊降臨日」“Whitsunday”〔四行
詩七連二八行の詩、WIL・二二―一六〕の第一連「聞
きたまえ優しい（鳩）よ我が歌を／そして抜けよ黄金の翼
を我が裡に／我が柔らかな心を長く孵化しながら／それに
翼が生えてそなたと共に飛び去るまで」を参照〔M・七三
七―八〕。

- (2) The hidden stone, the Manna lies「反抗」〔小考(八)
59〕の最後にも引用されている「ヨハネの黙示録」2・17、
及び、「規則と教訓」〔小考(五) 2〕の二八行目「彼らの
星を あのと隠されていた食物を 鎮めたのだ」とその
訳注(6)参照〔F・一九八〕。

- (3) *Elvin* 錬金術士が探求した、他の金属を黄金に変える力
を持つような製薬。これはG・ハーバートが意図した、神

の備えている触れるもの全てを委容させる力を、讀える譬
喻上の意味〔RA・五六四〕。

- (4) ここからの四行、G・ハーバート「祭壇」“The Altar”
〔祭壇の形に印刷された一六行、WIL・八九―九四〕の
五―一二行目「単独の心よ／御身の力しか／切れない／石
だ、／だから私の堅い心の／各々の部分は／この枠組の中
で出逢って／御身の名を讀えるのだ」と比較〔M・七三
八〕。

- (5) the Law, and Stones. モーセの律法は石板に書かれた
〔RA・五六四〕。

- (6) my faults are thine. G・ハーバート「最後の審判」
“Judgement”〔五行詩三連計一五行の詩、WIL・六五三
―五五〕の一五行目「そこで御身は私の過失は御身のもの
だと分るだろう」参照〔M・七三八〕。

ある悔恨を吐露しながら聖書を讀えるこの作品、詩集全
体を締め括る「反歌」〔小考(四) 17―19〕の直前に現れる
第二部掉尾の「聖書に」〔同12―13〕―語り手の聖書体験を
率直に述べながらの聖書讚美―と、遠く微妙に呼応する。

優しい救世主は亡くなった、と最後に訴える全て十音節
の一四行詩で、A B A B、C D C D、E F E F G G、と押韻

する。「おお〈神〉の書物よ！さらば！」と結ぶ「聖書に」は、全てが八音節詩行の二行連句三六行で流れるように展開されていた。同じようにバイブルに「そなた」と呼びかける作品でも、形式上の変化がみられる。「聖書」に続く詩が「役立たず」とは、これまた表題が振っている。

概してヴォーンの詩が、音の肌理細かさや韻律の操作によつて著しく印象深い効果を引き起す、ということはその音楽が、目指す意味の何か重要なものを示唆したり実現している詩節で読者を喜ばせる「P・一七九」、と指摘したペテットが、おそらくヴォーンの手書いた最も音楽性に富む作品だとして冒頭六行を引用する作品である。

役立たず⁽¹⁾ Unprofitables

何と豊かな、おお〈主〉よ！何たる爽やか 御身の訪れ⁽²⁾
正に〈丁度〉今だった どうしようもなくぶら下っていた
私の侘しい木の葉が

塵と泥で汚れたのは、
唸りを上げる突風の一吹き一吹きが 私を撃ち抜いて、切り取ったのだ

彼らの〈若さ〉と美を、〈冷たい〉驟雨が摘み取り挽ぎ取ったのだ

彼らの活気と血を、

しかし御身が優しい一瞥で彼らの悲しい衰退ぶりを
見渡して下さったので 私は元氣になり、もう一度

吸い込むのだ あらゆる香気を 芳香を、

私には露は〈没薬^{ミルラ}〉のように匂うし、終日

胸に〈太陽〉を丸ごと纏う、そのような倉庫には

御身の〈眼〉から光が一条^{すじ}指す。

しかし、ああ、我が〈神〉！どのような果実を御身はこれから得られるのか？

何という貧しい木の葉を一枚私はこれまで落としたことか

御身の花輪に仕えんとして？

こうして御身は一日中 恩知らずの雑草⁽³⁾の手入れをなさる

それでそれが終ると 悪臭か霧しか

私には後に遺す匂いが無い。

[M・四四一]

訳注

(1) この作品、ヴォーンの「オリヴ山」[(三) B]「小考

〔六〕24、G・ハーバートの「花」〔The Flower〕〔七行詩
七連計四九行の詩、W i l・五六—七〇〕及び同じく
「瞥」〔The Glance〕〔八行詩三連計二四行の詩、W i l・
五八—九一〕と比較〔M・七三八〕。

タイトルは、ヴォーンの墓石の彼自身の意志で刻まれた
碑銘「役立たずの僕、罪人中最大の者、吾れ、ここに横た
わる」〔*Servus inutilis : peccator maximus hic iaceo*〕及び
「マタイによる福音書」25・30「この役立たずの僕を外の
暗闇に放り出せ」と比較〔R A・五六五〕。

(2) How rich, O Lord! how fresh thy visits are! G・ハー
バート「花」の一—二行目「何と爽やかな、おお〈主〉よ、
何と清々しく清潔なことか／御身の戻りは！」参照〔M・
七三八〕。

(3) a thankless weed 「雑草」とは肉体、生身の譬喩。延
いては語り手自身だろう。

ABCABCDEFDEFGHIGHIと押韻する一八行
詩で、十音節二行と六音節一行とが一組で連なる。反復さ
れる母音、子音、母音韻、中間韻、半韻律が微妙に響き合
って実に律動豊かに繰り上げられるこの作品の音楽を、拙
訳が幾らかでも再現できないのは残念である。

「私」の〈役立たず〉が嘆かれると、キリストが誕生す

る。次の作品である。

キリストの降臨 Christ's Nativity

目覚めよ、喜ばしい心！ 起きて〈歌え〉、
汝の〈王〉の〈誕生〉日だ、

目覚めよ！ 目覚め！

〈太陽〉が揺すぶり出している

光をその頭髮から、そしてずっと

〈芳香〉を吹き出し、その一日に風趣を添えている。

2

目覚め、目覚めよ！ 聞け、森が鳴り響き⁽²⁾
風が囁き、忙しい泉が

〈調和〉を生み出す様を、

目覚めよ、目覚め！

人間は彼らの司祭者だ、立ち上って⁽³⁾

差し出すべきだ 捧げ物を。

3

私は何か〈鳥〉か〈星〉だったらいのに、
森で羽搏いたり 遙か高く上っていたい、

この〈住まい〉の上を

罪の〈道路〉の上を！

そうすれば〈星〉か〈鳥〉は

輝いているか 今尚御身に向かつて歌っている筈だが。

4

私にあつたらいいのに 私の最良の部分に

御身にびつたりの〈部屋部屋〉⁽⁵⁾が！ あるいは私の心が

清らかであつてくれたら

御身の秣桶と同じように！

しかし私はすっかり汚れ切つて淫らだ、

それでももし御心があれば 清らかにして下されよう。

5

優しい〈主〉よ！ だから御心を。もうこれ以上

この〈忌み嫌われ者〉を彷徨かせて御身の扉を汚させない

で下さる、

彼を癒し、彼を〈安らかにし〉

彼を解放してあげて下さい！

そしてもう一度 不思議な誕生によつて

生命の〈主人〉が〈地上〉に生れるようにして下さい。

II

何と親切なこと 天国は人間に！ もしここで⁽⁶⁾

一人の罪人が率直に

改心するなら〈喜び〉が生れ、どの領域も

音楽の点で〈競い合う〉。

そうなると私たちは声を張り上げないだろうか？

情けや救いは

我々が感謝するには値いしないのか？ 生命は⁽⁷⁾

もはや喜ばれる贈物ではなくなるのか？

あそこから降りてきて

ここで私たちの代りに殺された人、⁽⁷⁾

その方は今や見棄てられるのか？ その方の

あらゆる悲痛に意味は無くなるのか？

〈愛〉も苦悩も拘束力はないのか？

私たちはすっかり石なのか、〈土〉なのか？⁽⁸⁾

あの方の血塗れの情熱も注目されず

一日でさえ彼の誕生は祝福されないのか？

ああ、何たること！ 御身の誕生は今やここでは

一年のうちに数えられてはならないのです。

[M・四四二―四三]

訳注

(1) The Sun..his looks [RA・六五―]の「鷲」"The Eagle" [ヴォーンの後の詩集「甦ったタレイア」*Thalia Rediviva* (1678)に収録の五八行の詩]の注「太陽光線をアポロ神の毛髪だとする概念は古くからの図像学のもの」を参照 [RA・五六五]。

(2) how *th'wood rings* G・ハーバート「人間の混声曲」"Mans melody" [六行詩六連計三六行の詩、WIL・四五八―六一]の一一二行目「聞け、小鳥が歌い／森が鳴り響く様を」と比較 [M・七三八]。

(3) こゝからの二行、G・ハーバート「摂理」"Providence" [四行詩三八連計一五二行の詩、WIL・四一五―二七]の一一―四行目「人間は世界の司祭者で提供する／全てのものへ捧げ物を」参照 [同]。

(4) *Shining, or singing* G・ハーバート「クリスマス」"Christmas" [四行詩三連プラス二行に二行連句二〇行の

作品、WIL・二九〇―九四]の三二行目「それから我々は歌い 我らの日々はいつも輝く」を参照 [同]。尚、その詩の構成にヴォーンのこの詩は似ている。

(5) ヴォーン自身の詩「住居」"The Dwelling-place" [M・五一六]の一一―一六行目と比較 [RA・五六五]。

(6) ここからの三行、「ルカによる福音書」15・7「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」を参照 [同]。

(7) この行から最後まで、クリスマスと Good Friday (復活祭前金曜日「受難日」)を祝うのを廃止した一六四四年一月二三日の、議会の法令に言及している [M・七三八]。

(8) all *stone, and Earth*「墮落」[小考(二)54]の二行目「全てが石だったわけではなく、(土)でもなかった」と比較 [RA・五六六]。

(9) 前注(7)の、クリスマスを宗教上祝うのを議会が廃止したと [F・二〇〇]。

前半は八音節詩行四行と四音節詩行二行との六行がAABCCの型で押韻する五連、IIはABABCCDD::GHHAAと押韻する一八行詩で、奇数行は八音節、偶数行

は六音節（六、八行目は七音節）。二部構成の作品で、クリスマスの祝祭遵守（observation）廃止を温和に激しく慷慨した「私」は、引き続きその後六年間〈均衡〉による心の〈平和〉を求め続けながら悲憤を〈抑制〉してきた挙句、キリスト降臨を祝う遵守通告（observation）をもう延引すべきではないと訴える。

抑制 The Check

平和、平和を！私は顔を赤らめ御身に耳を傾ける、御身が言葉に表せない程多量の塵まみれの物語になり その真只中で私の心が

同じお仕着せを纏って 他の

諸々と同じように飼い馴らされている時に、その時から六年 掘り返されて何か若々しい〈眼〉がそこで〈均衡〉を探し求めながら

何も見つけられずに御身を風のなすがままにしておいたり

〈粉砕〉の二歩手前に到らせて

御身の連なり合った慎しい

塵を撒き散らしてから 親愛なる肉体よ 告げるのか

御身の栄光はいずこか？

2

真昼に 夜はぞっとするほど恐しく

なる（ものと思つ）ている彼が

眠らず 物憂さを振るい落として 顧みず

〈太陽〉と共に働き

その日に昼間の負い目を返して

（安眠）を求め、闇を拘束して）自分が

夜の様々な恐怖を免れてみたいと希うように我らもまたそうすべきだ。あらゆる事柄が我らに死ねと

教え その道をはっきり示している

我らが通り過ぎながら

気にかけないうちに、だから無駄にしてはならない

御身の光の閃きを。

3

御身の前触れに思い巡らそう、御身の若者（仲間）に

なるよう定められた〈生き物〉が

暇乞いしては死んでゆく、〈鳥〉、獣、木々

全ては成長し、あるいは呼吸しているが
広範な用語の一つ 〈死〉を 所有する。

おお だから弄ぶでない！懸命に希つてみよう 彼なら

この悲しい陰に〈太陽〉を浄めさせ〈られ〉て
変えるだろう 陰つた靄を光線に、その湿気を昼間に、

その力は甚だ秀でていたので

〈土〉を精霊に造り

真物の栄光を住まわせられるのだ

塵の中に、石という石の中に。

4

聴こう、彼が汝を〈招く〉有様を！ 何という

〈愛〉と悲しみの声で

彼は懇願し〈呼ばれる〉ことか、おおこの汝の日々に汝は
己の善なることだけ知っていて欲しかったと！

血の 〈神〉御自身の血の〈叫び〉が 汝を

目覚めさせないのか？ 〈彼〉は命じられる 注意せよ

酒酔いに、飽食に、〈悲嘆〉にと、

それなのに汝は眠り続けた、今どこにあるのか汝の抗議は

汝の〈境界〉は、汝の〈愛〉は？ 立ち去れ、

その日を取り戻すのだ⁽⁸⁾
遵守通告をおそらく明日に⁽⁹⁾
延ばさない日を

[M・四四三―四四]

訳注

(1) ここからの五行 A dusty story ∴ digg'd up G・ハーバート「死」『Death』四行詩六連二四行の詩、W i L・六四七―四九の五―八行目「何故なら我らは汝を見做したのだ／六年か十年経った時だと／生命と感覚を失う／肉が塵に、骨が棒に変った後のようだと」、及び、同じく「教会内記念物」『Church-monuments』「六行詩四連計二四行の詩、W i L・二三四―三八」も参照「M・七三八」。

(2) kind = naturally associated (OED a 1c) その言わんとするところは、死者の「慎しい塵」粒子は互いに天然に連合しているということ「R A・五六六」。

(3) dear flesh 同じ「頓呼法」『文の中途で感情が高まりその場にはいない人、擬人化したもの、観念、に対して呼びかける修辞法』が、G・ハーバート「教会内記念物」の一七行目にある「M・七三八」。

(4) ここからの十行第三連五行目まで All things ∴ Death ヴォーソンの散文「オリーヴ山」[M・一七四・一一―一六]

の次の一節と比較、「もし我々に使いこなせる程の賢さがあれば、目には見えなくても我々を死すべき運命の精神に思いを到させてくれる親切な物が存在する。昼日中は死んで夜になり、春は冬になり、花々は己の墓の中にずっと根を張り、木々の葉は自らの緑を解き放って我らの足下に落ち、そこで飛び回り我らに囁きかけるのだ」〔R・A・五六六〕。

(5) fore-runners G・ハーバートにこの表題の詩「The Fore-runners」〔六行詩六連計三六行の詩、W・L・六一〇—一六〕がある〔同〕。

(6) large = comprehensive 〔同〕。

(7) wher's now. / Thy Lines G・ハーバート「物臭」〔Dut-nesse〕〔四行詩七連計二八行の詩、W・L・四一〇—一二三〕の一七行目「では私の境界はどこにあるのか」参照〔M・七三八〕。

(8) The day 最後の審判の日〔R・A・五六六〕。

(9) observation = outward show, warning ラテン語の *observatio* の教会に関わる意味から。「ルカによる福音書」17・20「神の国は、見える形 (observation) では来ない」〔同〕。

一連二二行の四連から成る。各行の音節数は順に、10 5 7 6 10 6 10 6 4 8 〔第四連は9〕⁵で、各連ともABACC

D D E F E F 〔第四連はE F F E〕Bの型で押韻する美しく〈抑制〉された詩型の作品。この詩の次に「混乱と脆さ」〔小考(五) 9—11〕が配されるというのも意味深長であるが、それに世俗詩を斥けようと主張する作品が続くところが興味深い。抑制しても避け難い混乱と脆さ、それが世俗の恋愛詩に繋がるとでもいうのだろうか。敢えて〈無益〉と公言しなければならぬ心に、読者の思いが留まる。

無益な詩⁽¹⁾ Idle Verse

去れよ、去れ、奇妙な愚考、砂糖まぶしの罪よ、

影はもはや私の扉ではない、

私はこれ以上〈蜘蛛の巣〉は掛けない⁽²⁾

私には余りにも負い目が多い⁽³⁾。

なぜなら私の若い際中、夜のうちにな

私の大いなる護り手は微笑むので

私たちは〈縁組をする〉、私の唯一の光なので⁽⁴⁾

〈手を結ぶ〉わけだ、彼らの策略を退けるべく、

闇雲の、破れかぶれの発作〔歌〕⁽⁵⁾だ、身仕度の

し方を学び、私たちの恥を取り繕うとは、
鼻を衝く毒に金めつきし 墮落に

増しな名を許すとは、

若々しい血の〈せせらぎ〉⁽⁶⁾と裡深い器⁽⁷⁾、

〈愛〉の〈長い衣〉を纏った情欲、

スカーフか手袋で身を包む 病んで熱に

浮かされた魂たちの取りとめのない話しぶり⁽⁸⁾、

それで十分に 私のもつと暖かな日々は

にやにや笑つて君の上に輝けるだろう⁽⁹⁾

絡ませるな 私の〈イトスギ〉に君の〈月桂樹の葉〉を⁽¹⁰⁾

あるいは〈薔薇〉に私の〈イチイ〉を、

去れよ、去れ、何か更に緑の深いものを探し求めて、

ここは雪が降り、凍りつく所、

〈サヨナキドリ〉には春を待ってもらおう、

私の年月は冬ばかり。

[M・四四六―四七]

訳注

(1) 詩才に恵まれた人々が携わるには相応しくないとして世俗詩を拒絶するのは、G・ハーバートによっても、例えば「ヨルタン」一、二二「Jordan」I, II 各々、五行詩三連、六行詩三連の詩、W i l・一九七―二〇三、三六五―一七の二篇などによつて扱われる主題だが、ヴォーンもこの詩集の序文「小考(四) 22」で、この件について激しく咎めている「R A・五六七」。宗教詩でないものは無益な詩だという主張。

(2) I will no longer Cobwebs spin G・ハーバート「世界」
「The World」五行詩四連計二〇行の詩、W i l・三〇〇―
二」の二―三行目「幻想を紡ぎながら彼女が言っているのが聞こえる／私の繊細な蜘蛛の巣がその枠組を支えたのだ」とと比較。蜘蛛の巣は装飾であるが不用心な人にとって
は畏であるという意味で恋愛詩に似ている「R A・五六七―八」。

(3) on the score = in debt [F・二一〇四]。

(4) my only light キリスト [R A・五六八]。

(5) fits 掛け言葉 狂気の激発と詩の一節 OED fit sb1, sb
2 3b [同]。

(6) Purges 小川がさらさら流れる時のような動きか音の意

OED などの例が引用されている「F・二〇五」。

(7) bowled 感情か感覚の中心の意味において 'bowled' 「中部・内部」の意。同情・哀れみの宿る場所「同」。

(8) Sick with a scarf or glove G・ハーバート「愛」
"Love" I「ネット」、W・L・一八八—一九〇の一—
四行目「御身への賞讃は誰が歌うのか？ スカーフか手袋だけが私たちの手を暖めて、その手に愛について書かせるのだ」と比較「M・七三九」。

(9) Simper'd and shind G・ハーバート「探索」
"The Search"「四行詩一五連計六〇行の詩、W・L・五五—五九」の一三—一四行目「それでも私には見守れる 星々が上方で／＼にやにや笑い輝く様子を」と比較「同」。

(10) Bays 征服者や詩人に名誉を与えるための花輪にされる月桂樹の葉「R・A・五六八」。

この 'day' には「名声」「評判」という古い意味もありそれが重複しているよう。

(11) Yewgh = yew 故人への哀悼の印に墓地に植ええられる木なので、悲しみ、死、復活、の象徴とされる。

八音節詩行と六音節詩行が A B A B の型で押韻する二四行の作品。

そしてこの次に「息」「日」「曜日」が来る。その後方八、

九番目に、前号で取り上げた「復活祭の日」と「復活祭讃歌」が並ぶ。この二篇を前後に包む作品を次に取りあげよう。まず前に来る詩である。

身仕度 Dressing

おお御身、清らかで潔白にされた魂を愛する方！
夜が明けて影が次々消え去るまで、〈百合〉⁽¹⁾の
中で群れを飼っている方、〈燠〉⁽²⁾で触れて下さい
私の凍った心に、そして御身の秘密の鍵で開けて下さい

私の荒涼とした部屋部屋を、私の陰鬱な〈胸〉は
御身の澄んだ火⁽⁴⁾で洗練して、塵へと燃やして下さい
あの暗い〈混迷状態〉⁽⁵⁾を、私の中に巣くって
御身の〈聖堂〉⁽⁶⁾を罪深い錆で汚すのですから。

御身 聖なる無害の汚れなき司祭長さま！

あらゆる罪を償うこの上なく十分な献身が

輝かしく征服したものは 何ものも抵抗できず

みどりごにあってさえ勝利が鎮静し、巧く収まります。⁽⁷⁾

お与え下さい 御身の惨めな者に

御身の神秘に満ちた〔霊の交り〕を、

不在でも 彼には見えて

生きて 死んで 御身と共に起き上がれるように、

彼にここ地上でそのように従わせましょう 結局は

彼が御身を受け入れられるように 御身の意向のままに。

お与え下さい彼に、御身専用の証印⁽⁸⁾を、

証拠となるものを、印⁽⁸⁾を、御身の贈物はよく効くので

ここでのこういう先触れは

将来をはつきりさせられましょう、

御身が何を指示されようと信仰は報われて欲しい、⁽⁹⁾

パンは御身の体⁽⁹⁾の代りに、葡萄酒は御身の血の代りにと。

お与え下さい彼に（憐れんで）愛を、

天上での御身と共に成長した二本の花々を、

短い発作のせいでの怒りなど

認めたりなさらない愛情と

私のより御身の手足をよしとする⁽¹⁰⁾

ほど神々しい憐れみとを。

お与え下さい私に、我が〈神〉！ 恩寵を、

光線と、お顔の明るさを、

そうすれば私はおよそ獣とは違つて⁽¹¹⁾

御身の神聖な御馳走を戴くか

それとも御身の尊い血の畏れ多い神秘の数々を似たような

〔風習〕を思つて私の〈厨〉の食べ物として使いましょう。

ある者は御身に向かつて座り、食べます

御身の体を、自分たちに〈共通の〉食物として、

お私にはそのようなことはさせないで下さい！

哀れな塵^{ダスト}は相変らず身を低くすべきもの、

だから私の魂と肉体は跪き、跪いてお辞儀をします、

もしも〈聖人〉と〈御使い〉の皆さんが平伏するなら 御

身より深々と。

[M・四五五—五六]

訳注

(1) That .. See 「雅歌」2・16—17「恋しいあの人は私の

もの／私はある人のもの／百合の中で群れを飼っている人

のもの／夜が明けて影が消え去らないうちに／恋しい人よ

帰ってきて／かもしかのように、若い雄鹿のように…」
〔F・二二六〕。新旧約全聖書を通じて唯一の世俗の愛の詩
歌集の一節が嵌め込まれている。

(2) touch… heart 「イザヤ書」6・6—7 「するとセラフ
イムの一人が手に燄を持って飛んできて…それを私の口に
触れさせて言った、見よ、これが汝の唇に触れたので汝の
咎は取り去られ罪は赦された」〔RA・五七二〕。

(3) thy secret key G・ハーバート「聖餐式」"The H. Com-
munion"〔六行詩四連と四行詩四連の計四〇行の詩、Wi-
L・一八二—一八六〕の二—二二行目「そして人の知らな
い鍵を持って／魂の最も隠微な部屋部屋を開ける」と比較
〔M・七四〇〕。尚、「樹液」〔本稿後出〕の一六行目参照。
(4) thy clear fire 「マラキ書」3・2 「彼は精錬する者の火
のようだ」〔RA・五七二〕。

(5) refine… Confusions G・ハーバート「星」"The Starre"
〔四行詩八連計三二行の詩、WiL・二六七—七〇〕の第
三連「まず御身の火花で燃やして塵にする／愚者と愚考よ
りもつと悪い欲情を／それから御身の光で洗練し／そして
それを輝かすのだ」参照〔M・七四〇〕。

(6) high-priest 「ヘブライ人への手紙」4・14 「我々には
諸々の天を通過された偉大な司祭長、神の子イエスが与え
られている」〔RA・五七二〕。

(7) even in babes… win 「詩篇」8・2 「みどりごと乳吞

み児の口によって砦を築き報復する敵を鎮めようとする」
〔同〕。

(8) private seal… sign 「コリント人への手紙」二、1・22
「神はまた私たちに証印を押して保証として私たちの心に
〔霊〕を与えて下さった」〔同〕。

(9) Whatever… blood G・ハーバート「神性」"Divinitie"
〔四行詩七連計二八行の詩、WiL・四六八—七二〕の二
—二四行目「しかし彼は私たちにお命じになる、彼の血
を葡萄酒として飲めと。／彼の好むところを命ずる、それ
でも私は確信する／汝がそこで企むことを食べ味わいさえ
すれば／救いになり、それは不可解なことではない」と
比較〔M・七四〇〕。特にこの第六連は、聖餐式に関わる
と多くの批評家は観ているが、認識による理解よりは経験
することの重要さを表明していると主張する論もある〔W
iL・四六九〕。

(10) resent 「好意を寄せる」「是認する」という廃れた意味
だろう (OED, 8c) 〔F・二二六〕。
この行は憐れみを定義しているようで、語り手の嘆願者
は、おそらく、自らのよりはキリストの手足の苦痛を経験
できるようにという、キリスト流の憐れみを希求している
のだろう〔RA・五七二〕。

(11) ここから最後まで (That never… more thou.) につい
て。清教徒の改革者たちは主張した、聖体拝領者は地位を

保つべきだと、それも原始教会の愛餐の状況に似ていられる程、また、高教会派「英国国教会で、カトリック教会の伝統、特に、礼典、儀式、教会の権威への服従を重んじる派」の式典を少しでも匂わせるものは避ければ避ける程良いのだと「同」。

ＡＢＡＢの型で押韻する四行三連（九行が十音節、三行が一一音節）に、ＡＡＢＢＣＣの型で押韻する六行（音節数は順に６ ８ ６ ６ １０ １０）の五連（「ＲＡ」のテキスト）が後半は二連ずつ繋がった変化のある構成（「Ｍ」、「Ｆ」のテキスト、本稿は当然こちらに依拠）の作品。

復活祭とその讃歌の詩の直後が、キリストの聖体の象徴であるパンと霊の象徴である葡萄酒を拝領する儀式が話柄の次の作品である。

聖餐式 The Holy Communion

爽やかで神聖な饗宴 歓迎！⁽¹⁾ 生命⁽¹⁾ようこそ！

私は死んで 揉め事の深間に填っていた、

そこへ恩寵と祝福が御身と共にたつぷり注がれてきて
乾いた刈り株さえ蘇った

こうして魂を肉体が活気づかせ
こうして初めのうち事態は野蠻⁽²⁾で

暗く、空虚で（未熟だ）⁽³⁾つたが
御身の（御言葉）によって各々美しさと日付⁽³⁾を備えた、

全ては御身によるものだったし
依然としてそうに違いない、

存在するか生きているものには⁽⁴⁾
自らの（活力）はないし、救われない

御身の手が開いたり閉じたりする時に、
治癒と（切り傷）、

闇と昼間の光、生命と死は
御身の息遣いによって翻る木の葉にすぎない。

御身不在では精神は死ぬし
暗黒が座るのは

最も神々しい才智の上、
（太陽）の上に（掩蔽）が横たわるように。

しかし御身の亡くなった時のあの大きい闇は⁽⁵⁾
覆いが御身の今際⁽⁵⁾の息と共に破れると

私たちに見せてくれたのだった
御身への道を。

それで今　こういう確かな神聖な絆によって

御身の血

(私たちの至高の善)⁽⁶⁾が

私たちの眼を清めて

視力を与えて下さった後⁽⁷⁾

御身は御自身と　私たちの魂及び

肉体との結婚を　約束なさるのだ

永続する光の中で。

十分ではなかったのか　御身が値^{あたい}を支払って

私たちに眼をお与え下さっても

私たちに眼が無くて、御身がまた手を取って導きながら

私たちを尚　目覚め

させ続けなくてはならないのでは、

私たちが眠っていたり⁽⁸⁾

御身の許から這い出す時⁽⁹⁾

誰が御身無しで堪えられようか？

十分ではなかったのか　御身の息と

血を　呪われた死によって失うだけでは、

しかし御身は私たちに任せることも

なさらなければならぬ、私たちは御身から

あの二つを奪ってしまったのだから、これらの印^{しるし}から

私たちを淨めてそのまま清らかに保つ

手段を　奪ったのだから、

誰が御身の苦悩をもたらしたのか？

おお　シャロンの薔薇よ！　おお　谷間の

〈百合〉⁽¹⁰⁾よ！

御身は今度はどうなられるのか、御身が飼われる群は食物になり、〈羊飼い〉になるのだが　御身の羊にとつて。⁽¹¹⁾

〔M・四五七―五八〕

訳注

(1) Welcome : : life G・ハーバート「大饗宴」『The Banquet』「六行詩九連計五四行の詩、W i l l・六二七―三二」の一―二行目「爽やかに神聖な声援　歓迎／本当に歓迎」と比較「R A・五七三」。

(2) ここからの三行、「創世記」1・2―3「地は形なく空虚で、闇が深淵の面にあり：神が言われた、光あれと、それで光が現れた」〔R A・五七三―四〕。

(3) and date　天地創造の時〔F・二二八〕。

- (4) ()からの六行は、「苦痛」〔小考(七) 30—31〕を参照
 「M・七四一」。
- (5) But that … last breath 「マタイによる福音書」27・45、
 51「昼の十二時に全地は暗くなり、三時まで続いた」神殿
 の垂れ幕が上下に避け、地震が起き岩が裂け…〔F・二
 一九〕。
- (6) sovrain good じばじばは ‘summun bonum(最高善)の意。
 ベイコンの随想「真理について」の中の「真理について知
 ることは…人間の本性の中での至高の善である」を参照
 「RA・五七四」。
- (7) 「復活祭の日」〔小考(十) 5〕の一四—一五行目「彼の
 治癒力に富む血を塗るのだ 汝の〈両眼〉に…彼の血が
 汝の心を癒されよう」参照〔F・二一九〕。
- (8) 「マタイによる福音書」26・40「弟子たちの所へ戻って
 御覧になると彼らは眠っていた…」〔同〕。
- (9) from thee creep 「マタイによる福音書」26・71。追従者
 であることを咎められた時のペテロがしたように〔同〕。
- (10) 「雅歌」2・1「私はシャロンの薔薇、野の百合」〔F・
 二二〇〕。「英国教会」〔小考(四) 8〕の二二行目「おお
 野の薔薇よ！ 谷々の百合よ！」参照〔RA・五七四〕。
- (11) St. Thomas, ‘Lauda Sion’の八九行目 ‘Bone pastor, pants
 vere’ 良いい羊飼いの、真物のパン)を参照〔M・七四〇〕。
 「F・二二〇」のテキストでは、この行末には感嘆符！が

ある。

第二連がAABCBDDCの型で押韻する他は主に二行
 連句で、それにABABAかABBAの型の押韻が混じる全
 五二行の詩。音節数は行頭の出入りが明示する四種(七行
 が10、一七行が8、一〇行が6、一八行が4音節)。心象
 の躍動によって非信徒にも想像力を十分掻き立たせる詩で
 ある。

前号で取り上げた「復活前主日パーム・サンデー(英国国教会での名称。
 プロテスタントでは「棕櫚の日曜日」)の前方十一番目に
 は、棕櫚の樹が主題の詩がある。

棕櫚の樹とは、バイブルでは、「出エジプト記」15・17
 に、一行が宿営したエリムの村には、十二の泉に七〇本茂
 っていたとある(棗椰子なつめやし)のことで、そこを皮切りに総計
 三五回「SJ・七六九」現れる木である。影深く高々と聳
 え立つ端正な姿と多くの果実を捻らせるところから、古来
 「優雅」「豊饒」「繁栄」、神の広大な「恩寵」「保護」、ある
 いは「徳」「愛」「忠誠」「正義」などの象徴となっている
 「de v・三五六一七」。仮庵の祭りの小屋はこの木で建て
 られた(「レビ記」23・40)し、ソロモンの華麗な宮殿の彫

刻意匠（列王記）上6・29他）になっている。イエスを最後に迎えた群衆はこの枝を手にしていた（「ヨハネによる福音書」12・13）し、その葉は「勝利」を意味した（「ヨハネの黙示録」7・9）。この由緒ある植物にヴォーンの巡らしたい想いの声を聞いてみよう。

棕櫚の樹 The Palm-tree

親愛なる友（¹） 座ってしばらくこの陰を担いたまえ（²）
私が爾来長らく君のを抱いているように。この〈植物〉は
甚だ^{おそ}庄えつけられ頭を下げてきて 罪が君とそれの両方を
辱めないうちに、他の木々と同等の自由を

享受したのだったね。しかし今や、エデンの園の
呼吸と空気から閉め出されてそれは、男の満足同様
繁茂する所はどこにもない。それでこういう重圧が（⁴死や
罪のように）彼に伸し掛かるのだ、身を曲げれば曲げる程
ますます人は成長するのだから。（天球の）本質は依然と
して家庭を⁵熱望する、このことは往時のソロモンは

花々と彫刻群と〈翼〉の不思議な
技能と〈^{ケルゼム}智天使〉と〈棕櫚〉によって予言したのだった。

これはキリストと共に上方で〈神〉の^{うら}裡に
隠れていた生命^{いのち}で、常に（隠されたまま）増えてゆき、
噴き出し、成長してゆくおおよそ値の付けられない木なのだ
不滅の果実を宿す〈木〉なのだ。

こうして〈精霊〉が現れ、競争を行い、闘って（⁷）
その闘いに勝ち、偉大な響め面を恐れず
微笑みを愛することもなく、主人の意志を
動かしてきて、自らの〈王冠〉を受け入れにゆく。（⁸）

ここに〈聖人がた〉の忍耐⁹がある、この〈木〉は
彼らの涙によって洗われるのだ、花々が夜露に
養われるように。しかし君には見えない〈¹⁰人〉が
ここに座っていて 彼らが流す涙を数えるのだ。（¹¹）

ここに彼らの信仰もある、それをもし君が守るなら
我々二人が別れる時には私は旅に出て 道々

〈花冠⁽¹²⁾〉を摘み取ろう、君が眠っている間に、そしてそれを君の頭のために織り上げよう、君の目覚めに備えて。⁽¹³⁾

[M・四九〇—九一]

訳注

- (1) Dear friend sit down G・ハーバート「知られざる愛」
“Love unknown” [七〇行の長詩、W・L・四五二—五八]
の冒頭の語句 [M・七四七]。
- (2) bear awhile this shade/As I have yours long since 「陰」
‘shade」に「う」語に地口がある、木が投げかける「影」‘shade-
ow」と肉体が魂におよぼす「陰」との。「記八・時がある日
私の傍らを過ぎて行った」[小考(九) 20]の四一行目
「魂のなま影」‘soul-less shadow」参照 [R・六〇一]。
- (3) before sin did degrade/Both you and it 「昇天日」[小考
(十) 9]の四〇行目にも「人間がまた罪を、罪が腐敗を、
持ち込まないうち」とあるが、「あらゆる天然物に衰亡す
る傾向があるのはアダムの罪の結果である」(R・五八
九) [R・六〇一]。
- (4) ハリからS三行 M.P. Tilley, *Proverbs in England*, p.37
「棕櫚の木は真直ぐ成長すればする程ますますその担う重
さは重くなる」、及び、「復活前主日」[「棕櫚の日曜日」][小
考(十) 22]の三九行目「あの〈棕櫚〉のように曲りはし

ても私は耐えよう」を参照 [M・七四七]。

- (5) home 「天国」を指す。「申し出」[小考(十) 3]の四
五行目「汝の胸を家庭で充たせ」参照 [R・六〇二]。
- (6) By flowers and carvings ∴ Palms foretold G・ハーバ
ート「シオン」エルサレムにある丘」[六行詩四連計二四行
の詩、W・L・三八一—八三]の四—五行目「森はすっか
り飾られていた／花々と彫刻群で、めったに観られない不
思議なものだった」[M・七四七]及び、「列王紀」上・6
のソロモンの神殿の描写を見よ [F・二七九]。
- (7) Here Spirits that have run their race ∴ And won the
right 「コリント人への手紙」一、9・24、26「競技で走
る者は皆走るが、賞を得るのは一人だけだから、賞を得る
ように走りなさい：私は走りはするがやたらには走らず、
空を切るような闘いもしない」[R・六〇二]。
- (8) meet to receive their Crowns 「同右」9・25「競技をす
る者は全て節制する。彼らは朽ちる冠を得るためにだが、
私たちは朽ちない冠を得るために節制する」[同]。
- (9) Here is the patience of the Saints 「ヨハネの黙示録」
14・12の冒頭文、直ぐ続いて「神の掟とイエスへの信仰を
守る者たちが要る」。尚、「同黙示録」13・10「」に聖な
る者たちの忍耐と信仰が必要となる」[M・七四七]。
- (10) One 「神」[R・六〇二]。
- (11) One ∴ all the tears they shed 「詩篇」56・8「あなた

は私の当てなき放浪を語られる、私の涙をあなたの皮袋にお入れ下さい、この涙はあなたの記録にはないのですか」
[同]。

- (12) Garland 勝利の花輪 'wreath'、もしくは「王」冠 'crown'。
「花冠」「小考」(七) 29の最後と比較 [同]。
(13) against you wake 最後の審判の時に [同]。

全て奇数行同士、偶数行同士が押韻する交互韻十音節の
四行詩七連。

木と言えばヴォーンなら、枝葉や花、根などの外部より
内部の樹液に一層深く思いを到しそうだ。果たせるかな?!
第一部の終り近くに力作がある。

樹液⁽¹⁾ The Sap

現れよ 樹液のない(木の花)よ、まだ這うなよ(地上)を
自分が最初に生れたことを忘れたままでは、
それは塵⁽²⁾からではないが、もしそうならどうして君は⁽²⁾
このように呼び求め⁽³⁾ 渴望するのか 露を?
それはそちらへは行かないが、もしそうならどうして

こんなに成長して天国へ手を伸ばすのか?
君の根は病氣しか吸わず、そこに虫どもが座つて⁽⁴⁾
その根を食用にと要求する。

君をここに据えた人がそれから(注い)なのだ
今や君に情報を知らせられるような何かを。
〈星々〉の彼方には没薬⁽⁵⁾の丘があり

そこから何滴かここに降ってくる、

その上にセイレムの〈王子〉⁽⁷⁾が座るが、彼が

君に密かな食事⁽⁸⁾を馳走するのだ、

そこに君の〈国〉があり、彼はその道であり

おまけに鍵⁽⁹⁾を持っている。

それでも彼はここに時々住んで君のために引き受けたのだ

悲惨な世界を、

君のために、君は最初の人間の腰部に落ちたのだから

あの丘からこの谷へと、

それでももしも彼がそうしなかったなら何よりも真実なのは

二つの死が君の当然の報⁽¹⁰⁾だったということだ、

しかしここから出かけてゆき、どのような難儀が

友人の平静を乱しそうなのかをよく知っていて

持ち前の不思議な愛情を悉く我らに役立てようと

彼は自らの神聖な血に

意志によって我らの樹液と〈強壯剤〉を与えたのだ、今や

この中にあの至福の天国があるので

本当にそれを味わう人に とにかく衰退などが

触れるわけにはいかないのだ、

そういう深遠な生命には、しかも神の奇蹟の力が宿って

いるので それは要求し 高め

動かすことになるだろう、あの振り落とされて

死ぬものとされている そして新しくも

されるような精霊を。だからこの樹液を受け取り

その十分な蓄えを手に入れて、それでいて

それを容れる器を確実に

力の限りこの上なく清らかにしようよ。どのような

時にも（閉ざされてはいても）身に備わっているのだ

強力で稀な露が、

それは唯、悲嘆と愛情とを引き出すただけだ、これは

確かだから決して間違いないく

自分の器を十分に洗うことだ、それから謙虚に

この鎮痛剤を 痛みに苦しむ魂のために持つてゆこう

そうすればこうしてそれを飲んだ人は 確信できるのだ

人には〈喜び〉とは誠に真物で

全く完璧な〈安らぎ〉であり、あらゆる罪を退ける

全く生き生きとした恩寵を感じるのだと分るので

人は〈告白する〉ことになろう 〈慰め〉は〈天国〉をも

たらしさえし、そこからやつて来るものなのだ。

〔M・四七五—七六〕

訳注

(1) G・ハーバートの「平和」¹Peace²。「六行詩七連計四二」行の詩、W i l・四三七—四二」と全般にわたって関連がある〔M・七四四〕。

(2) ここからの四行、「嵐」³「小考」(七) 17の三三—三六行目「植物の根、葉、花、種子のそれぞれ土、水、空気、火との照応が述べられる」参照〔R A・五八五〕。

(3) Thus call⁴∴ for dew G・ハーバート「恩寵」⁵Grace⁶。「四行詩六連計二四行の詩、W i l・二二六—二二〇」の一行目「露を、草は呼び求めることは出来ない」参照〔M・七四四〕。

(4) Thy root ∴ worms ∴ their meat ハーバート「平和」の一七—一八行目「掘った虫がとも良いと／みえたものを貪っているのが私には分った」参照〔M・七四四〕。

- (5) beyond the Stars ... thy Country ヴァーノン「平和」
 「小考(一)17」の冒頭二行「我が(魂)よ、一つの国がある／星々の遙か彼方に」参照「M・七四四」。
- (6) an hill of myrth「雅歌」4・6「私はミルラの山へ、乳香の丘に、登ろう」「F・二四三」。
- 「英国教会」「小考(四)7、訳注(2)」、[息][日]曜
 日「本稿前出」に同類句がある。
- (7) Prince of Salem ハーバート「平和」の二二―二三行目
 「年取った(王子)がいて／セイレムに住んでいた」。ハッ
 チンソンが述べるように、メルキゼデクはセイレムの王で
 パンと葡萄酒を持ってきた神の祭司だった(「創世記」
 14・18)。その命令に従ってイエスは司祭長にされた(「ヘ
 ブライ人への手紙」6・20)。その称号セイレム王は平和
 の王の意(同・7・2)であり、それ故彼はキリストの原
 型になる「M・七四四」[F・二四三]。
- (8) thy secret meals ハーバート「平和」の二七―三九行目
 「キリストの死後その墓から麦が生えたのでそれを植える
 と実って各地に拡がった。味わってみると平和と歓喜をも
 たらす密かな美德が在る。それを庭に撒いて育て、パンを
 作れ…という主旨」参照「M・七四四」。
- (9) the key 「身仕度」[本稿前出]四―五行目参照「同」。
- (10) Two deaths had bin thy due「復活祭の日」「小考(十)
 5」の八行目とその訳注(3)参照「同」。

- (11) sacred blood ... Cordial ハーバート「生贄」“The Sacri-
 fice”四行詩六三連計二五二行の長詩、W i l・九四―
 一〇」の一五八―五九行目「それが示すのは、私の血が
 人間の衰退を回復させるのに／残された唯一の方法であり
 強壮剤だということだ」を参照「同」。

十音節と六音節の二行が対で押韻してゆく二行連句で、
 最後は一一音節と七音節の二行で締め括る五〇行の作品。
 「生氣」であり「活力」でもある「樹液」を自らに希求
 するのに樹液欠除の(木の花)(活力乏しい自らの譬喩)
 を呼び出すことから始めて、キリストへの信仰でそれを得
 ようとする詩である。その意味で、マーチンの観るよう
 に「訳注(1)ハーバートの「平和」との関連があるだろう、
 部分部分への参照に値いする言及がみられるだけでなく。
 何しろその作品は、「平和」とは何かを発見し定義づけよ
 うとする目的の詩「W i l・四三九」で、その途上で幾つ
 かの意味――後退と孤独、自然の平穏な清澄、旧約の平和、
 世俗の権力と壮麗さ――を示唆し、最後には、真の平和と
 はキリストによる贖いを示す新約がもたらす精神の確かな
 安定なのだ、理解させる「同」のだから。訳注(5)で

冒頭二行が示されるヴォーン自身の同題の詩「小考（一）17」は、自らを恃む「愚かしい領域」は去って「慈悲深い友」であるキリストに到りつけば「平和」を得られるのだと自らの〈魂〉に呼びかける引き締った韻律二〇行の作品であった。

本稿は、前号で取り上げた諸作との関連から「息」「日」「曜日」とその前後の未紹介作品を一瞥した。今回の部分からだけでも、この詩集の作品群が各々独立しているながら微妙に相呼応し連合している趣きが窺えた。もう一篇、重要な詩を見ておきたい。

摂理 Providence

神聖で深遠な手！⁽¹⁾

その素早い指令に援けられて

〈御使い〉はあの聖なる〈井戸〉を示された、

それで気の毒なハガルは諸々の恐怖から自由になり

微笑みへと変えたのだ 苦しみ悩む

若いイシユマエルの懇願の涙を。

何と靈妙な〈雲〉に包んで

（不思議な確かな慈悲を覆い隠して）

御身は人間に、目に見えない食べ物とお金を

運んで来られることか ぴったりに届くようにと

その口許に、あの恩知らずの巣箱に

御身の〈蜜蜂〉を殺して蜜を食らうというのに！

もしも私が御身の僕なら

〈奉仕して虜さえ自由にするが〉⁽³⁾

魚が私の貢ぎ物を全て払ってくれるだろう 速く⁽⁴⁾

飛ぶ〈ワタリガラス〉が私に食物を届けてくれるだろう⁽⁵⁾

だから私は〈花々〉のように相変わらぬ奇麗にすっきりし

ていられよう

まるで〈五月〉⁽⁶⁾しか月を知らなかったみたい。

私は怖れはしない 人間が

策を廻らし力を揮って出来ることを、

擦り切れていない財布は強奪されるかも知れないが⁽⁷⁾

誰にも孤立させたり見棄てたりは出来ない

〈太陽〉と共に沈み 翌朝

同じく生き生きと現れる国を。

哀れにも鳥たちはこの教義を歌い

乾いた丘陵に あるいは荒涼たる荒野に

芽生える香草は

御身の露もしとどの朝の時間を知って

夜通し霽や驟雨を見張り

それから御身の気前の良さを飲み込んで讚えるのだ。

永久に死んだままでいますように

御身を信頼せず 浅ましくも

黄金と富を捜し求め、御身からの持て成しばかりか

自らの魂もある日は貸そうとしない者は。

彼の〈冠〉は彼の色々な希望同様 土であつてくれますように
うに

彼の蓄えるものは 彼の敵が使い尽してくれまますように！

たとえここにある私の分け前の全てが⁽⁸⁾

毎年御身によって与えられる量が

私の理由なき敵共によって横領されても

それが私を悲しませることは決してないだろう

私は知っているのだから どれ程十分に御身が苦痛を和ら

げて下されるかを、

御身の手は 眼と同様に開かれている。

愛と真実の偉大な〈王〉！

私の意固地だった青年期を憎もうとされなかつたし

年老いても私を見棄てたりなさるまい、

喜々として私はポントスの羊のように⁽⁹⁾

ニガヨモギを常食にするでしょう

御身が〈腕〉で私をお囲い下さっているのだから。

〔M・五〇五—六〕

訳注

(1) Sacred and secret hand! 以降第一連は以下と比較せよ、

〔森〕「小考(二)49」の四八行目「吾が瓶を満たすことになり、私が渴き死ぬことはないだろうから」、「懇願(四)

B」「小考(六)28」の一二行目「御身はあの嘆き悲しむ

若者 に耳を傾けられたのだ！」、及び「種子密かに成長して」「小考(九)27」の一六行目「おお 彼の瓶を満た

して下さい！ 汝の子供が泣いている！」〔R・A・六一—

一三]。

- (2) *Hagar* アブラハムの妻サラの側女。アブラハムとの間にインシュマエルを生んだ。
- (3) *Whose service makes ev'n captives free* > "whose service is perfect" *The Book of Common Prayer* (英国国教会共通祈禱書) の早禱の第二祈禱文 [RA・六一三]。
- (4) *A fish shall all my tribute pay* イエスの命令でペテロは口に納税金を食わえている魚を捕らえた、「マタイによる福音書」17・27 [F・三〇〇]。
- (5) *The swift-wing'd Raven shall bring me meat* エリアが養われたことに言及「列王記」上、17・6「数羽の鳥が彼に朝晩パンと肉を運んできた」[同]。
- (6) *no month but May* 「決意」[小考(八)51]の二三—二四行目「五月」のように／＼幸福で瑞々しい」及びその訳注(8)参照[M・七四九]。
- (7) 「ルカによる福音書」12・33、キリストが弟子たちに教えている、「自分の持ち物を売って施しなさい、擦り切れない財布を作り尽きない富を天に積みなさい、そこなら盗人は近寄らず虫も食い荒さない」[F・三〇〇]。
- (8) *If all my portion* (一)からの四行、ウォーンの散文「オリーツ山」[M・一六七・一一五]「私の〈敵共〉はどれ程酷く〈情容赦ない〉か、御身が恵み深く私に与え賜うたあの分け前と蓄えを私から奪い取ったばかりか私の友人や最

愛の近親の血で手を洗ったことを、御身は御存知だ」参照[M・七四九]。

- (9) *Pontick sheep* プリニウス『博物誌』*Pliny, Natural History*, xvii. 28 [F・四三二]「ポントス(黒海に臨む小アジア北東部の古代国家、後にローマの属州)種のニガヨモギは、その素晴らしさを賞讃されておりそれを食べて肥えた家畜には胆汁がなくなると言われる」[M・七四九][F・三〇一]。

A B C C Bの型で押韻する六行詩八連で各連一行目の六音節以外は全て八音節。

「摂理」とは概略、被造物に対する神あるいは自然の、配慮と保護、及びその理法のことだとすれば、それに思いを巡らし巡らせようとするとする声がこの詩集の通奏低音ではないかと筆者は考え始めている。その意味での、先刻の「重要な」である。本「小考」にもそろそろ結論が近づいている。

* 参考文献 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

[A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical*

- Poets*. London : The Macmillan Press, 1992.
- [㉓] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1972.
- [㉔] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations*. London : Cobden Sanderson, 1927 ; rpt. New York, 1969.
- [㉕] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.
- [㉖] Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*. London : The Hogarth Press, 1949, 1st. ed. 1929.
- [㉗] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.
- [㉘] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London : Edward Arnold, 1970.
- [㉙] Behell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.
- [㉚] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silexist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.
- [㉛] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.
- [㉜] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174-75. [英倫宗徒誌 『靈珠のたゞの詩』 (研經社 一九七四) 三二二―三二五]。
- [㉝] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday. 1964 ; New York University Press, 1965.
- [㉞] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.
- [㉟] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.
- [㊱] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London : Oxford University Press, 1938 ; rpt. New York : Octagon Books, INC., 1967.
- [㊲] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.

- [H] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan: A Life and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.
- [HW] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford: Basil Blackwell, 1929.
- [HW-] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford: 1932; rpt. New York: Haskell House, 1966.
- [H] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets: A Casebook*. London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1974.
- [H · G] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- [L] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [L · I] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1865.
- [M] Martin, I. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957.
- [M-] Martin, I. C., ed. *Henry Vaughan: Poetry and Selected Prose*. London: Oxford University Press, 1963.
- [MW] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton: Princeton University Press, 1969.
- [M-] Martz, Louis L. *The Paradise Within: Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London: Yale University Press, 1964.
- [M-] Martz, Louis L. *The Poem of Mind: Essays on Poetry/English and American*. New York: Oxford University Press, 1966.
- [M · =] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London: Yale University Press, 1962.
- [1st ed. 1954]
- [P] Pettet, E. C. *Of Paradise and Light: A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- [R] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes: English Lyrics in a European Tradition*. The Hague: Mouton, 1973.

- [R] Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete Poems*. New Haven and London: Yale University Press, 1976.
- [S] Simmonds, James D. *Masques of God: Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- [S] Strong, James. *The Exhaustive Concordance of the Bible: Showing Every Word of the Common English Version of the Canonical Books, and Every Occurrence of Each Word in Regular Order; Together with a Comparative Concordance of the Authorized and Revised Versions, including the American Variations*. New York and Cincinnati: The Methodist Book Concern, 1894; rpt. 1926.
- [SC] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London: Faber and Faber, 1993. [ロナルド・シユハード編注『T・S・エリオットノクラーク講演』村田俊一訳(松柏社 二〇〇一)]。
- [S >] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry: Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y.: Kennikat Press, 1939.
- [T] Tve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery*. The University of Chicago Press: 1947; rpt. Phoenix Books, 1961.
- [T-I] Tuttle, Imilda. *Concordance to Vaughan's SILEX SCINTILLANS*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1969.
- [W] Whittier, John Greenleaf. *Anti-Slavery Poems: Songs of Labor and Reform*. London: Macmillan and Co., 1889.
- [W] Williamson, George. *The Donne Tradition: A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York: The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.
- [W-I] Williamson, George. *A Reader's Guide to the Metaphysical Poets*. London: Thames and Hudson. 1968.
- [W-H] White, Helen C. *The Metaphysical Poets: A Study in Religious Experience*. New York, 1936; rpt. New York: Collier Books, 1966.
- [W-J] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

〔V〕 Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*.

Amsterdam・London: North-Holland Publishing Co., 1974.

〔荒川〕 荒川光男「黙想詩「夜」を読む」(『十七世紀英文学のポリテイクス』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九〇。一八一—一九七)

〔川崎1〕「ヘンリー・ヴォーン の自然神秘主義」(川崎寿彦『薔薇をして語らしめよ—空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四—一九八。)

〔川崎2〕川崎寿彦『鏡のマニエリスム—ルネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二—一五八。

〔松崎〕松崎毅「ルーパート王子と「驚」——ヘンリー・ヴォーン の世俗詩と検閲をめぐる論考——」(『十七世紀と英国文化』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九五。一七二—一九二)

〔PⅠ〕 大槻真一郎責任編集『プリニウス博物誌植物篇』新装版、八坂書房、二〇〇九。

〔PⅡ〕 大槻真一郎責任編集『プリニウス博物誌植物薬剂篇』新装版、八坂書房、二〇〇九。

バイブル

〔AV〕 Authorised Version (of the Bible). 別称 King James Version. 欽定訳聖書。The Holy Bible containing

the Old and New Testaments Translated out of the Original Tongues and with the former Translations diligently compared and revised by His Majesty's special command, A.D. 1611. Appointed to be read in Churches. (London: The British and Foreign Bible Society).

〔New〕 The New English Bible with the Apocrypha. (Oxford University Press Cambridge University Press, 1970).

『聖書 新共同訳 旧訳聖書続編つき』(東京・日本聖書教会 一九八九年)

尚、本「ヘンリー・ヴォーン小考」でのバイブルは、勿論ヴォーンが知らないものなのでこの新共同訳ではなく、それを参照しながらではあるが、権威ある英訳標準版「AV」の、なるべく忠実な拙訳である。

本誌連載のこれまでの拙稿は左記のように略記、算用数字はそのページを表示。

〔小考(二)〕「アスク川の白鳥——ヘンリー・ヴォーン小考」『成城文藝』第一九九号、1—24、二〇〇七年六月。

〔小考(二)〕「その瞑想を追い始める——ヘンリー・ヴォーン小考(二)」「同」第二〇〇号、47—67、二〇〇七年九月。

〔小考(三)〕「〈死〉からの再出発——ヘンリー・ヴォーン小考(三)」「同」第二〇一号、13—33、二〇〇七年十二月。

〔小考(四)〕「序文」と「反歌」に包まれて——ヘンリー・ヴォーン小考(四)」「同」第二〇二号、1—32、二〇〇八年三月。

〔小考(五)〕「複眼による並置比較思考——ヘンリー・ヴォーン小考(五)」「同」第二〇三号、1—27、二〇〇八年六月。

〔小考(六)〕「追求は異なる角度、視点から——ヘンリー・ヴォーン小考(六)」「同」第二〇四号、15—42、二〇〇八年九月。

〔小考(七)〕「花と星へ 嵐と夜から苦悶に耐えて——ヘンリー・ヴォーン小考(七)」「同」第二〇五号、13—43、二〇〇八年十二月。

〔小考(八)〕「〈隠された宝〉へ向かって——ヘンリー・ヴォーン小考(八)」「同」第二〇六号、17—66、二〇〇九年三月。

〔小考(九)〕「哀歌に託す自己励起——ヘンリー・ヴォーン小考(九)」「同」第二〇七号、1—33、二〇〇九年六月。

〔小考(十)〕「昇天と復活への思い——ヘンリー・ヴォーン小考(十)」「同」第二〇八号、1—28、二〇〇九年九月。

拙訳でのへん付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。

*本稿は二〇〇八年度成城大学文芸学部特別研究助成による成果の一部である。